

ましみずをたたえて
 淵のしずかなる
 ごとも智者は
 みおしえを
 いかくおさめて
 こころやすけし

法句經八二

實相寺 花園會報

令和七年
 五月一日発行
 発行所
 臨濟宗妙心寺派
 陽明山 實相寺
 實相寺花園會
 〒761-0450
 高松市三谷町
 1811番地1
 TEL087-889-3838
 編集発行人
 山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第193号

お寺の掲示板

ちどりふち

嵐山の千鳥淵のような溪流の深い淵は、あせらず騒がず争わず、水は絶えず流れていながら、流れるとも見えず、千古の碧を湛えて、静寂そのものである。

み教えをよく守り、心の調えられたる智者もまた、この峡谷の淵のように、あせらず騒がず争わず、動いて動くとも見えず、深く仏心を湛えて静寂平安であると、ブツダは教えられる。

『法句經 真理のことば』 山田無文老師 春秋社



施餓鬼會、花園會總會開催

4月13日(日)午前10時より、施餓鬼會春期総供養、及び第44回實相寺花園會總會を開催したところ、4名のご寺院様にご参加頂き、

当日の参拝者は38名でした。また引き続き62通の委任状を得て、第44回花園會總會も開催されました。審議された議案については總會報告書でご案内の通りです。

「父母恩重經を読んで④」

「それよりこのかた、母の懐を寢床となし、母の膝を遊び場となし、母の乳を食物となし、母の情けを性名となす。飢えるとき、食を求むるに、母にあらざれば喰らわず。渴けるとき、飲み物を求めるに、母にあらざれば飲まず。寒きとき、着物を加うるに、母にあらざれば着ず。暑きとき、着物を脱るに、母にあらざれば脱がず。」

国語辞典『大辞林』には「懐子」として、「①大切に育てられた子供。また、世間知らずの子、特に娘。②親が懐に入れるような幼児。嬰兒。」と解説されています。最近はい余り赤ちゃんを背負っている女性

は見かけませんが、かつては「おんぶに抱っこ」で育てられたという人も多かった様に思います。

「母、飢えにあたるときも、含めるを吐きて、子に喰らわしめ、母、寒さに苦しむときも、着たるを脱ぎて、子に被らす。母にあらざれば養われず、母にあらざれば育てられず。その揺籃を離れるにおよべば、十指の爪の中に、子の不浄を食らう。」

丁度、燕が子育てする季節ですが、鳥に限らず、私も微かな記憶に母方の祖母が、よく口に含んで噛み砕いてくれた奈良漬けをお茶漬けに入れてくれた記憶があります。今そんなことすると不潔だと怒ら

れるのでしようが（笑）、私は喜んで食べていました。

現代は飽食の時代ですが、僅か八十数年前は戦争で食べる物がありませんでしたし、昭和初期には東北では飢饉で娘を身売りしたり、「欠食児童」という言葉が流布したりもしました。歴史的に見れば、つい最近のことです。そんな自分の食べものが無い時でも、母親はまず子供に食べさせてきたのです。また紙おむつが無い時代、汚物で汚れた布を洗うと、爪に汚物が入ったのでしよう。でも母親は忙しいですから、そんなことを気にしてはいられなかったのです。計るに人々、母の乳を飲むこと、

一百八十斛となす。父母の恩重きこと、天のきわまりなき如し。」

斛は数量の単位で、「石」と同じ一斗の十倍、百八十キロリットルですが、この数は強調の意味ですので、こだわる必要はありません。要は乳幼児の間、せいぜい数えの3つ、満2歳ぐらい迄でしようか。それぐらいの短い期間だけでも、

人は両親、特に母親には大変な苦勞を掛けてきました。「親の恩」等と言われると、誰しも煩わしく思いがちですが、でも「お母さんがいなければ貴方は、この世に存在していなかったのですよ」という事実をこのお経は伝えたいのです。

(続)